

# 南方（セレベス）

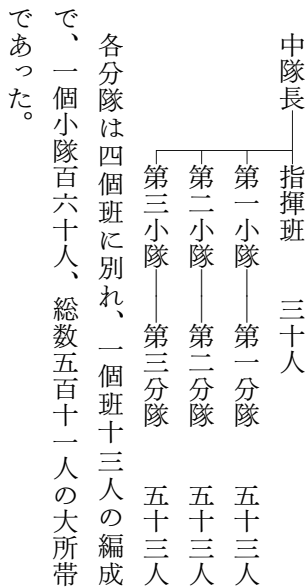
## 建築勤務第五十二中隊

### の行動概要

福井県 山本 行雄

表記に就いて記したいと思いますが、同部隊は後方部隊であり、私は交替要員として途中より勤務した者で、以前のことや分遣後のことについては伝え聞き程度であることをご了承願いたい。しかも八十三歳ともなり記憶も惚け気味であり、尋ねるにも戦友はほとんど亡くなっており聞く事もできず、果たして参考になる事が書けるか誠に不安である。

同部隊の正式名称は野戦建築勤務第五十二中隊で満州第八二三五部隊「内田隊」とも称された。中部第六十四部隊「歩兵第三百三十六連隊」にて第五十一中隊と共に編成された独立中隊である。そして独立中隊と言っても輜重隊のような編成で、左記のように大組織で、歩兵としてみれば一個大隊位の兵員であった。



私は、昭和十六（一九四一）年十二月二十八日、旧制高等専門学校を学徒動員の第一回繰上げ卒業となり、同十七年二月一日現役兵として中部第六十四部隊に入隊した。

（注）歩兵第三十六連隊は北支に出兵中、中部第六十四部隊も昭和十八年七月岐阜に移転、中部第四部隊と改称）

入隊後、熊本教導学校は「予備士官学校は急増した士官候補生の育成の場が足りず、下士官育成の為の教導学校も使用した」ということで、約六カ月半余りの教育で見習士官を命ぜられ原隊に復帰する。戦時中とは言え、いかにも粗製濫造と言わざるを得なかった。

こうして私と入隊後常に一緒だった島崎見習士官と二人で、表記の部隊の交替要員を命ぜられ、同年十二月十一日、朝鮮半島經由で陸路、任地の満州国閔島省龍井街に駐屯していた同隊に着任した。ここに着任して驚いたことは、補充兵ばかりである事は分かっていたが、ほとんどが三十代か

ら四十代、私の兄を知っている人が何人もいた。

中隊長、小隊長は建築関係の経験者、兵隊の内三人に一人は大工か左官、ブリキ屋等土建関係の職人だったと思う。しかも武器と言えば小銃が一個班十三人に二丁程しかなかったと思う。勿論軽機関銃等は一丁もなく、その代わり一個班に大工道具箱（今でも中高年の大工さんが使っている木製の大工具箱）や鶴嘴つるはし、スコップその他土建に必要な道具は充実していたが、昭和初期のまだ動力化されていなかった粗末な道具ばかりであったと思う。

私達の着任した当時は、十二月末の酷寒の時期で、作業もできぬこともあってか、龍井街の高台の一角にあった兵舎で待機中であつた。

当時は朝鮮半島に近い南満州ではあつたが冬になると大地も凍りつき、鶴嘴位では土に穴を掘ることもできないので、柵を作る時は柱を建て、その回りに砕いた氷を置き、小便をかけると、少々

の力ではビクともしない頑丈な柵が出来上がる。しかし春になるとこれらはバタバタと倒れたことなどがあって、兵士達は笑っていた。勿論、倒れる前に仕直しはしたが、特にソ連に近い北満では、冬小便するとその場でツララになるので、金槌でコーンと叩き割った等冗談を言うぐらい寒い所であった。

このような駐屯の状態であったが、当時はソ連との国交状態がそれ程悪くなかったこともあり、たいして逼迫ひっばくした情勢ではなかったと思う。このような状態の時我々が赴任したのであったが、赴任して間もなく中隊長より兵士達に歩兵としての軍事訓練をするよう命ぜられ、私は古年兵、島崎見習士官は初年兵の訓練を受け持つこととなった。しかし小銃も少ない後方部隊の補充兵に、歩兵訓練ができる筈もなく、ただ基礎的な動作と、体力維持に終始する毎日だったと思う。

四月に入り気候も良くなり、氷も溶けだし、四

月末より作戦用通信網整備のため、琿春―杜荒子―春化方面の地形調査を行った。五月初旬、第二小隊は電信第十六連隊金津大尉の指揮下に入り、十二輻の貨物自動車に分乗して現地に入り、通信線を張るのに邪魔になる樹木の伐採に従事した。険しい谷間での作業は大変だった。

同年七月上旬、第一次伐採作業が終了し、第一小隊と交替して本隊に復帰し、山砲兵第七十一連隊の兵舎構築作業に従事した。約四万平方メートルの規模であった。

同年九月下旬には第七十一師団自動車廠、杜荒子出張所の構築に従事した。また同年十一月上旬には琿春地区の第七十一師団の自動車廠、兵器廠、貨物廠、病馬廠、軍馬防疫所など計約四千方メートルの新築工事に従事した。そして同年十二月一日付で、山本、島崎両見習士官は陸軍少尉に任ぜられ、同日付予備役編入、同日召集、野戦建築勤務第五十二中隊付を命ぜられた。

同年十二月六日、琿春地区の作業終了ともななって間島省龍井街にあった兵舎に復帰した。

この作業期間中、私は全く土木建築工事の経験がなかったので、作業の指揮は全部下士官または古年兵に任せ放しで、私は本隊や他部隊との連絡等をしたほか何をしていたか思い出せず自分でも呆れている。軍隊なればこそ小隊長が勤まったのであろう。

同年十二月八日、南方転進の命令を受領した。

「威部隊の戦闘序列に入らしめられ、剛部隊の隷下に入らしめられ」と言う命令であった。即ち真部隊「第四航空軍指令部」のニューギニア転進に伴う宿舎設営を目的とする転進命令であった。

翌十九年一月九日夜、龍井駅を客車六輛、貨車九輛にて内地に向け出発した。一月十四日早朝、関釜連絡船にて出航、下関港には夕方入港した。

大成旅館その他で二泊、十六日門司港で「マカッサル丸」(三〇〇〇トン)に全員乗船、翌十七日門司港を出港し佐伯港に入港した。しかし敵の潜

水艦等の跳梁状況をみたためか、また門司港に戻った。そしてようやく同月二十五日、十隻の船団を組み、駆逐艦一、掃海艇二の護衛の下、八ノットにてジグザグコースをとりつつ蛇行、途中敵艦の襲撃にも遭遇せず、十一日間かけて二月五日、全船無事パラオ港に入港した。

朝より下船開始、パラオ島中地区第五十四兵站隊残留隊長山崎中佐の下、ニューギニアへの船団を待機することとなった。

待つこと十七日、ようやく船団が入港し、二月二十二日中隊長以下百七十四人、主として第二小隊が「大成丸」(三〇〇〇トン)に先遣隊として乗船し、翌日出港した。途中敵艦の攻撃もなく四日間の航海を経て二十七日ニューギニア島のほぼ中央のホルランジャに入港、直ちに積載貨物の荷降しを行った。そしてセンタニ湖北岸五十鈴村に宿営し、道路補修工事、健兵寮新築、製材等に従事した。その後、真第八二二七部隊の兵舎、第四航空司令部宿舎建築等に従事した。この間、現地

人との摩擦の起きないように気を配っていた。

その一例として兵士が現地人の真似をして、サゴ椰子だったか中身の真っ白くて柔らかい部分をスコップで削り取り、叩いて潰し絞って水に晒すと立派な澱粉が取れた。しかしこの木は現地人の主食であることが分かったので取り止めた経験がある。

一方戦況は不利となりつつあったようで、島崎少尉率いる二百五十五人の本隊が乗船した輸送船が、ニューギニアを目前にしたマノクアリ沖で、敵の潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没、船団の僚船に助けられたが、五十五人の初めての犠牲者を出した。誠に残念なことであり、残った者が戦死者の分も戦おうと誓ったものだ。

しかし、戦況は利無く、第四航空軍司令部は、セレベス島に移駐することとなり、私は部下二十人と共にセレベス島に分遣を命ぜられ、三月二十六日、重爆撃機に分乗してヌンフル島カメリイ、

アンボン島リアンを経て二十九日、セレベス島ラングアン飛行場着、当地で業務に従事していた軍属二十人と共に、第四航空軍司令部移転工事に従事した。

同年四月十九日、作業は下士官に任せ、私に原隊復帰が命ぜられた。隊長に果物でも土産にと準備して軍の飛行機を待ったが、翌四月二十日、ニューギニア島ホルランジアが敵の艦砲射撃により全駐留軍後退の止む無きに至り、軍用機は勿論飛べなくなり、私も原隊復帰は不可能になってしまった。軍隊は運隊だと言われていたが、申し訳ないが私には誠に幸運だった。と言うのも、もし一日早く命令が出て原隊復帰していれば、今の私は無かったと思う。

復員後ニューギニア島より帰還した戦友は三人のみであった。話に聞けば後退する時、ほとんど食料を持たず、また長距離の行軍であったため、疲労、マラリア、食料難で、早く後退した者は草の根や虫まで食べて飢えを凌いだそうだが、後か

ら来る者は食べる草の根もなく、餓死する者、病死する者も続出、到底部隊行動も取れなくなり、戦友の面倒も見れなくなり、本当に地獄絵だったと思われる。

とくに悲惨だったのがトル川付近で、渡る橋はなく上流にも行けず、浅瀬を探して渡ろうとして足を滑らせて流れに押し流されたり、力尽きて流されたり、実に阿鼻叫喚であったであろうと推測され、ここで戦友約二百七十人が戦死、さぞかし口惜しく無念極まり無かったであろう。

このようにして途中でも約五十人が無残な戦死をされた。こうして目的地のサハラに到着した戦友は四十一人だった。島崎少尉も最後まで兵士の鼓舞に当たったそうであるが、九月二十一日マリアにより死亡されたとのことであった。またサハラに辿り着いた兵士も次々と倒れ、帰還した兵士は僅か三人と悲惨な結果となった。

同年四月二十五日、原隊復帰できなくなった

我々分遣隊は、第四航空軍司令部経理部勤務を命ぜられ、引き続きレイラムと言う部落に移駐し、航空軍将兵の保健寮建設工事に従事した。セレベス島は日本の南の気候に似ており、少々気温は高いが、ここレイラムはやや高地にあり、朝晩は涼しく湿気も少ないので過ごし易く、また日本軍が落下傘部隊を降下させてオランダより開放してくれた島民は非常に協力的で、我々の部隊もこの区長宅に寝泊まりし、身内同然の扱いを受けたことは非常に嬉しかった。

特に娘の誕生祝のパーティにまで招かれたことは忘れられない。尚この長男がまだ十五、六歳位であったが、頼みもしないのに片言の日本語で現地人の労働者に通訳をしてくれ、大変助かった。我々がアムランを離れるまでついてきてくれ、別れる時は涙を流して見送ってくれたことは今も忘れられぬ。彼も現在七十歳半ばの良いお爺さんになっているのかなあと、今一度会いたいものだと思っている。

またセレベス島には温泉も多く、ここレイラムの部落より一キロ程離れた小さな谷間の小川の横には多くはないが所々六十度位の温泉が湧いており、これを利用してお粗末ではあるが保健寮を建設した。前述したように、部落の人々が非常に協力的だったので予定よりも早くできた。またついでに少々上流に現地人の入る浴槽と脱衣所を造ったところ、経理部の上官に現地人の浴場を上流に造るとは何事と大目玉を食い、仕方なく下流に造り直し、部落の人に喜んでもらった。

その後、五月二十五日、アムラン湾の浜辺近くで戦闘機発着用の飛行場建設を命ぜられ、現地近くに移駐、兵舎は竹の柱に竹を割って拵げた壁と床、屋根は椰子の葉で。誠にお粗末な建物であったが、夏の暑い時でも風が通って結構快適であった。

滑走路等は勿論造ったことも無く、全くの手探り状態で、部下二十人と軍属二十人で現地の住民

約五十人を雇い、椰子林を伐採し、根を掘り起し土地を平らにし、人力で引くローラーで地表を固める簡単な作業で、幅三メートル長さ八〇〇メートルもあつたであろうか、戦闘機がようやく離発着できるぐらいの滑走路を造り、椰子林の中に避難用の誘導路も造つた。

飛行機が離発着するには、トラックで時速一〇〇キロは出せなくてはと言われていた。しかし完成間もない八月初旬、敵の爆撃機三機が来襲して爆弾を投下、八十日近い努力も水の泡、砂地であつたため大きな穴が十数カ所できた。日本の軍機を一度も迎えること無く哀れな姿を曝す結果となつてしまい、ただ呆然と佇むばかりであつた。

戦況いよいよ不利となり、第四航空軍もまたフィリピンに後退することとなり、分遣隊もフィリピンに移動の命令を受けた。直ちにラングアン飛行場に移動、軍の航空便を待ち、一次二次と兵十三人、軍属二十人を送り出したが、その後軍用

機も飛べなくなったので、仕方無くマカッサルより船を使ってフィリピンに向かうことを決意した。残った二人と牛車と徒歩、一部小型の漁船を使って、約二十日余りでようやくマカッサルに到着し、先に分遣した五人と合流して船便を待った。

同年十一月二十七日「大長丸」にてマカッサルを出港、十二月二日ジャワ島ジャカルタに入港、鉄道にてスラバヤへ行き軍司令部で今後の行動について打ち合わせを行った。その時偶然にも東京の専門学校での同級生、高瀬勝重君と逢ったが、ゆっくり話をしている間も無かったのは残念だった。その時、昭南（現シンガポール）では煙草が高値売れると聞き、友人より幾らだったか軍票を借り、しこたま煙草を買って兵隊に持たせた。その後昭南で金に換え、兵隊たちの給料として与えた。

移動中は給料はどこからも貰え無かったので大変幸運だったと言わざるを得ない。しかし帰国し

て二十数年後、その戦友にクラス会で会ったが遂に借金は返さず仕舞になっていて申し訳ない。

その後、ジャカルタより船便で昭南に渡り、飛行場大隊にて軍用機を待った。しかし結局、駄目で最後の手段として陸路貨物列車を乗り継ぎ、マレーシア、泰を経由して、翌二十年二月四日、仏領インドシナの西貢にようやく到着した。

早速、南方軍総司令部「威第一一六〇部隊」に転属を命ぜられ、同日付で第三船舶輸送服務司令部服務を命ぜられた。結局フィリピンには行けず、仏印のカムランに駐留する第六十六停泊場「暁第一九七七八部隊」で服務することとなった。しかし戦況は日増しに悪く、一隻の船も入港することは無かったので、ただ毎日を過ごすだけの申し訳ない日々であった。

同年三月九日「明号作戦」に参加した。仏領インドシナに駐屯するフランス軍の武装解除であった。カムランには三十人位のフランス軍がいたよ



うであったが、日本の海軍により呆気なく武装解除されたようであった。その後ツーランに移駐、宿舎施設工事に当たっていた。

昭和二十年八月十五日、重大発表があるのとこので集合を命ぜられ、ラジオによって初めて玉音に接した。しかし電波の状態が悪かったのか、しばらくは何が起きたのか分からなかったが、次第に敗戦を告げられた玉音と分かり、万感の思いで、しばらくは腑抜けの状態であった。幸いツーランに駐屯する軍も平静を取り戻したが、皆今後捕虜生活等が心配であったであらう。

仏領インドシナは南北に分断され、ツーランは北となったので中華民国軍の進駐するところとなり、幸いなことに蒋介石軍が進駐して来た。上層部でいかなる取決めがあったのか不明だが、復員のため乗船するまでは武装も解除されず、軍隊として維持されたことは幸いであった。彼らにしてみれば日本軍から攻撃を受け、相当な人民が犠牲

になったにも拘らず、捕虜である日本軍に対しては誠に寛大であった。またベトナム人も日本兵に對し、余り反感を抱いていなかったようで、街を歩いても以前と何ら変わっていなかったと記憶している。

中国兵は我々日本兵に対しては非常に親切で、言葉が分からないけれども親しく話し掛けてくれたり、私共が連絡のため自動車に乗って走っていた時も、中国兵が車を止めさせたので、困ったなあと思っていたが、何か一言二言喋べると、助手席の後の窓枠にしがみつき、ステップに足を掛けて喜んで車を走らせたのには驚くと共に気の良さに関心したものだ。日本兵ならきつと乗っているものを降ろして、自分が乗ったであらう。考えられないことであった。

この捕虜生活のうち一番ヒヤツとしたことが有った。それは、部下の兵士がその銃口に目をあてて覗いていたその時、部下はふざけて引き金を引いた。ところが弾倉を開いてみてビックリ実弾

が入っていたではないか。本当に運良く、これが不発弾であったので事無きを得たが、もし暴発して中国兵が死んでいたら、部下は勿論、傍らにいた私も軍法会議に掛けられ、死刑か無期懲役になって今の私はなかったであろうと、思い出してもゾッとする。

昭和二十一年四月二十一日、復員船に乗るため、列車にてハノイに移駐、直ちに武装解除された。私物は一切調べられること無く無事乗船、いよいよ祖国に向け出港、安堵の胸を撫で下したものだ。

乗船後久しぶりに日本の御飯を戴きその美味しさ、日本の白米ってこんなに美味しかったのかと感動した。副食もいらずパクついたが、しかし人間もいい加減なもので二回、三回と頂くうちに味が分からなくなってしまう。

同二十四日、名古屋港に入港、上陸と同時に米兵によって頭からDDTの粉剤を掛けられ、即日

復員を命ぜられ、復員列車に乗って各々郷里に向かって出発した。

復員後間もなく習志野の復員事務所に呼び出され、野戦建築勤務第五十二中隊の復員業務を依頼され、約一週間かけて整理したが、先にニューギニアから復員した三人の兵士の記録を見て、初めて中隊長以下ほとんどの将兵が戦病死あるいは餓死されたことを知り愕然とした。生還した将校は私一人であった。フィリピンに先行させた下士官以下十三人の兵士も敵の上陸作戦により散り散りとなり、結局五人しか生還できなかった。またパラオ島に残った五十六人の兵士も二十三人しか生還できなかった。

以上この稿を結ぶに当たり亡き戦友並びに御遺族に対し、心からの哀悼の意を捧げるものであります。

(元野戦建築勤務第五十二中隊)

陸軍中尉 山本行雄)

## 【解 説】

陸軍部隊は戦闘に直接関係ある部隊のほかに、各種特科部隊が編成され、それぞれの特種の任務を遂行していた。

体験記執筆者の所属していた建築勤務第五十二中隊も、多くの人々に知られていない後方勤務部隊で、戦闘に直接参加しない部隊である。しかし、名称のいかんに係らず、裏方部隊として苦勞していることは同じで、またそれを知る人は少ない。

それらの後方部隊、あるいはサポート部隊とも言える部隊の名称を列記してみる。

満州においては建設団という相当規模の大きな建設関係の部隊があった。それには次のような部隊があった。

鉄道監部、鉄道材料廠、野戦航空修理廠、海上挺進基地隊、海上挺進基地隊本部、

海上挺進基地隊本部、独立船舶工兵隊、高速輸送大隊、同中隊、野戦船舶廠、

要塞陸上建設中隊、特設警備大隊・中隊、工兵、自動車、陸上勤務隊、水上勤務隊、

通信情報隊、補給監部、兵站司令部、兵站監部、兵站警察隊、兵站勤務隊、自動車各隊、

水上輸送隊、同材料隊、同材料廠、水上輸卒隊、野戦建築隊、建設勤務隊、建設輸卒隊、

測量輸卒隊、測量隊、野戦築城隊、野戦防疫隊、軍馬病廠、野戦造兵隊、燃料廠、野戦作井

中隊、野戦防疫給水部、野戦病馬廠、燃料廠・同工廠、被服廠、糧秣廠、野戦衛材料廠、補充

馬廠、兵站部（本土）技術部、燃料技術研究所、俘虜收容所、船舶教導隊、満州練習隊、南

方教育部、教育隊、教導隊、練習隊、教育隊、幹部候補生隊、下士官教育部、教化隊、育成

所、練習部、軍管区部隊、師管区部隊、迫撃連隊補充隊、野戦重砲兵連隊補充隊、重砲兵連隊補

充隊、

砲兵情報連隊補充隊、船舶工兵野戦補充隊、船舶通信補充隊、機動輸送隊補充隊、海上駆逐隊補充隊、電信連隊補充隊、無線電信補充隊

教導飛行師団（本土）、航空師団司令部、教育飛行師団司令部、教育関係教育隊、教導飛行師団、航空師団司令部（本土）、航空師団司令部（本土、朝鮮3、南方1）、飛行師団司令部（本土、朝鮮、南方）、教育飛行師団司令部（満州1、中国1）、教育飛行師団司令部（本土）、航空師団司令部（本土、朝鮮3、南方1）、教育飛行師団司令部（本土）、三方原教育飛行師団、教育飛行師団（内外地）、練成飛行師団（同）、練習飛行師団（同）、航軍教育隊（同）、航空軍教育隊、航空整備師団（立川）、教導航空通信団（加古川）、航空基地設定隊。

山本氏も南方各地で苦勞されておるように、ま

さに軍隊は「運隊」と言われるごとく、その人なりに運によって苦勞し戦没している。